

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00117

研究課題名（和文）戦前東アジアにおける哲学：日本の植民地支配の観点から

研究課題名（英文）Philosophy in the East Asia 1920s-1945: From the perspective of Japanese colonial government

研究代表者

志野 好伸 (Shino, Yoshinobu)

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：50345237

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本による植民地拡大という状況の中で、東アジアの哲学者たちがどのように思索を展開したのかという観点にたち、個別事例を検討した。中国大陸においては、それまで西洋哲学を中心に研究していた張東ソン（くさかんむりに孫）、金岳霖、沈有鼎らが、この時期、西欧由来の哲学とは区別された中国的な哲学を模索していたことを明らかにした。日本に関しては、西田幾多郎の「日本文化の問題」についてとりあげ、そこで歴史の非合理性が強調されていることを明らかにした。台湾については、洪耀勳らが、京都学派からの刺激を受け、現象学を批判的に受容しながら、台湾の風土についての考察などを行っていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

普遍的な真理を追求する哲学者が、日本による植民地拡大という状況下において、みずからが所属する地域の文化的特徴を哲学的な次元で把握しなおそうとした事例について解明することができた。安易にナショナリズムを鼓吹することなく、個別的な地域の特徴を哲学的に論証しようとした試みの諸相を明らかにすることにより、多様な文化の共存を目指す上での参照軸を提供することができた。また、期間中「東アジアレクチャーシリーズ」と題した講演会をオンライン配信で5回実施し、国内外の研究者と意見交換を行い、学問水準の向上に努めた。

研究成果の概要（英文）： This study examined individual cases from the perspective of how East Asian philosophers developed their thoughts in the context of Japanese colonial expansion. In mainland China, Zhang Dongsun, Jin Yuequn and Shen Youding, who had previously studied mainly Western philosophy, shifted their interest to the research of the characteristics of Chinese philosophy. With regard to Japan, Kitaro Nishida's 'The Problem of Japanese Culture' was discussed, in which the irrationality of history was emphasised. With regard to Taiwan, it was revealed that Hong Yaoxun, stimulated by the Kyoto School, studied phenomenology and made the philosophical study on the climate of Taiwan.

研究分野：中国哲学

キーワード：植民地 京都学派 現象学 西田幾多郎

## 1. 研究開始当初の背景

本研究はポストコロニアリズム研究の一環に位置づけられる。ただし、ポストコロニアリズムが往々にして被植民地側の立場にたち、植民地側の言説を批判する構えを見せるのに対し、本研究では普遍的真理の探求や、よく生きるという普遍的価値の探求を旨とする哲学を対象とするため、植民地側、被植民地側の言説を価値づけすることはしない。むしろ、被植民地側の哲学言説は、植民地側のそれを取り入れつつそれに応答するかたちで形成されていることが多い。そこで、本研究は植民地/被植民地の区別を過度に強調することなく、戦前期に東アジアの各地域で形成された哲学を、トランスカルチャー（文化横断、中国語では「跨文化」）の視点から捉え直そうとした。「跨文化」は中国語圏、特に台湾や香港の学術研究で近年よく用いられる用語であり、本研究もそうした潮流を受けとめ、消化した上で進めていった。トランスカルチャーはまた、グローバリズムとも一線を画す。グローバリズムが同一の規準を要請するのに対し、トランスカルチャーという視点から、個々の言説が複数の異なる文化からの影響下に成立していることを強調しつつ、影響の受け止め方の違いや、その言説の独自性を擁護する方向を重視し、戦前の東アジアの哲学の展開において、日本の植民地支配という現実がどのように作用したのかを思想的に明らかにしようとした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、まず、埋もれていた植民地出身哲学者（主として台湾出身者）の言説に光をあて、その内容を紹介することにある。日本で哲学を学んだ洪耀勳、曾天從、林茂生らについて、彼らが日本の哲学者の言説をどう受容し、そこからどのように独自の思考を展開していったかを解明する。また、朝鮮出身でやはり日本で哲学を学んだ朴鐘鴻についてもとりあげる。

一方、宗主国側の日本でも、植民地の経験は哲学者たちの言説にも影響を与えており、西田幾多郎の「日本文化の問題」や和辻哲郎の『風土』、田辺元の種の論理などは、その一例となる。これらのテキストの意義を植民地支配という観点から読み直すのが本研究の2つ目の目的である。

また、3つ目の目的として、1930年代以降、日本による侵略が迫る中で、張東蓀をはじめとする西洋哲学を主たる研究分野としていた中国大陸の学者たちが、中国哲学の特徴の解明に力を注いでいく具体相について探究する。

## 3. 研究の方法

トランスカルチャーという視点は、近年盛んに採用される研究視角であり、本研究においても、関連する研究を大いに参照しつつ、個別のテキストの分析を行った。日本、中国、台湾など各地域の哲学者の言説を相互に読み比べることによって、従来見過ごされてきた観点を掘り起こすよう努めた。

研究対象が広いと、他の研究者との意見交換が研究推進のために必須であり、国際的な学術会議を開催することによって、当該課題に関する学術交流の場を設けるよう意図し

ていた。研究代表者および分担者が参加して設立した International Society of East Asian Philosophy の大会などの場を活用することを当初は考えていたが、新型コロナウイルスの世界的な蔓延により、この方法による研究推進は計画を見直さざるをえず、代替としてオンラインレクチャーを5回行った。

#### 4. 研究成果

研究代表者の志野好伸は、日本、台湾、中国大陸における現象学受容のあり方について、「東アジアにおける現象学の展開」をまとめ、『何処から何処へ 現象学の異境的展開』に掲載した。ここでは、ヨーロッパ留学の前に中国に立ち寄った和辻哲郎の見聞がその著作『風土』にどのように生かされているかについての研究、日本の植民地時代に台湾に生まれ、日本で哲学を学んだ洪耀勳と曾天従についての研究が含まれ、彼らの思想を、日本の同時代の哲学者、とりわけ京都学派に分類される人々との関連性に注意しながら分析した。洪耀勳や曾天従は、台湾で近年ようやく着目されるようになった対象であり、日本語での研究はこれまでほとんどなく、日本の植民地化での哲学研究について新たな貢献ができたものと考えている。

西田幾多郎については、志野が「日本文化の問題」の読解を主な対象とした「西田幾多郎の「物」をめぐる思想 源了圓論文を承けて」を執筆し、研究分担者の林永強 (Lam Wing-keung) は、「新儒家としての西田幾多郎 人格実現説をめぐって」を執筆し、ともに論文集『東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から』に掲載刊行した。また、林は “Nishida Kitarō and Virtue Ethics: With a Focus on Zen no Kenkyū” や “Reading Nishida Kitarō as a New Confucian: With a Focus on His Early Moral Philosophy” といった論考を発表した。

また、志野は、中国の論理学者である金岳霖と沈有鼎が、1930年代から1940年代前半の間に、中国哲学について探究した論考を発表し、彼らが普遍的な哲学を志向する一方で、中国哲学の独自性について考察した事例について、論文「論理学者にとっての中国哲学 金岳霖・沈有鼎を中心に」をまとめた。さらに、張東蓀について、「張東蓀の生命哲学批判」「張東蓀にとっての中国思想」という2本の論文を執筆し、張東蓀の関心が認識論から知識社会学に移り、伝統的な中国思想の特徴について積極的にとりあげるようになったのは、1930年代の日本の侵略をきっかけとし、民族復興という政治的意図を研究にも反映させたことによることを論証した。「健全な主体」としての個人を民族に埋没させることに警戒し、中国の伝統的な修養論を、西洋の民主制に接ぎ木しようとした張東蓀の思想は、植民地期の中国の思想として再評価に値するものであることを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>志野好伸   | 4. 巻<br>4             |
| 2. 論文標題<br>張東ソンにとっての中国思想   | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>Minerva 明治大学文学部哲学専攻論集  | 6. 最初と最後の頁<br>1-21    |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>志野好伸   | 4. 巻<br>3             |
| 2. 論文標題<br>蔡元培の哲学観   | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>Minerva 明治大学文学部哲学専攻論集  | 6. 最初と最後の頁<br>1-14    |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）  | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>志野好伸   | 4. 巻<br>73            |
| 2. 論文標題<br>張東ソンの生命哲学批判   | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>日本中國學會報  | 6. 最初と最後の頁<br>131-143 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>Yoshinobu SHINO  | 4. 巻<br>58            |
| 2. 論文標題<br>Chinese Philosophy for Logicians: The Case of Jin Yuelin and Shen Youding | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>Oriens Extremus  | 6. 最初と最後の頁<br>251-273 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし  | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-             |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>志野好伸                         | 4. 巻<br>17         |
| 2. 論文標題<br>光はどこから？ 西光万吉の政治思想           | 5. 発行年<br>2022年    |
| 3. 雑誌名<br>明治大学心理社会学研究                  | 6. 最初と最後の頁<br>1-12 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-          |

|   |                       |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名<br>Keung Lam Wing  | 4. 巻<br>1             |
| 2. 論文標題<br>Bodily Pathos and Virtue Ethics: On Miki Kiyoshi 's Logic of Imagination | 5. 発行年<br>2021年       |
| 3. 雑誌名<br>The Journal of East Asian Philosophy                                      | 6. 最初と最後の頁<br>31 ~ 42 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>10.1007/s43493-021-00009-2                              | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-             |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>志野好伸                         | 4. 巻<br>35          |
| 2. 論文標題<br>論理学者にとっての中国哲学 金岳霖、沈有鼎を中心に   | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>中国 社会と文化                     | 6. 最初と最後の頁<br>67-81 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

|  |                      |
|--|----------------------|
| 1. 著者名<br>Yoshinobu SHINO  | 4. 巻<br>120          |
| 2. 論文標題<br>Is Han Scholarship Science? : The Contrapositioning of Han Scholarship and Sung Scholarship in Modern China | 5. 発行年<br>2021年      |
| 3. 雑誌名<br>Acta Asiatica  | 6. 最初と最後の頁<br>91-111 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし   | 査読の有無<br>無           |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難   | 国際共著<br>-            |

|  |                    |
|--|--------------------|
| 1. 著者名<br>志野好伸                         | 4. 巻<br>2          |
| 2. 論文標題<br>道 仁斎と徂徠の間                   | 5. 発行年<br>2020年    |
| 3. 雑誌名<br>Minerva明治大学文学部哲学専攻論集         | 6. 最初と最後の頁<br>9-20 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし         | 査読の有無<br>無         |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著<br>-          |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>Yoshinobu SHINO                  | 4. 巻<br>2           |
| 2. 論文標題<br>La Voie : entre Jinsai et Sorai | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>Minerva明治大学文学部哲学専攻論集             | 6. 最初と最後の頁<br>37-51 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子)<br>なし             | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている (また、その予定である)     | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 5件)

|                            |
|----------------------------|
| 1. 発表者名<br>志野好伸            |
| 2. 発表標題<br>張東ソンにとっての中国哲学   |
| 3. 学会等名<br>東アジア哲学レクチャーシリーズ |
| 4. 発表年<br>2021年            |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>志野好伸   |
| 2. 発表標題<br>西田幾多郎の「物」をめぐる思想 源了圓論文を承けて                    |
| 3. 学会等名<br>国際日本文化研究センター「東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から」共同研究会 |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Lam Wing-keung   |
| 2. 発表標題<br>Rereading Nishida Kitaro; as a New Confucian: With a Focus on His Early Moral Philosophy |
| 3. 学会等名<br>国際日本文化研究センター「東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から」共同研究会   |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>Lam Wing-keung              |
| 2. 発表標題<br>日常とは何か：西田幾多郎の1945年の日記から考える」 |
| 3. 学会等名<br>香港公開大学、公開シンポジウム：大震災と復興の行方   |
| 4. 発表年<br>2021年                        |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Lam Wing-keung   |
| 2. 発表標題<br>Nishida Kitaro's Ethics and Classical Confucianism: With a Focus on the Book of Odes.                            |
| 3. 学会等名<br>The 5th Annual Meeting of International Association of Japanese Philosophy. Nanzenji and Kyoto University (国際学会) |
| 4. 発表年<br>2021年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>志野好伸   |
| 2. 発表標題<br>Interpretations on Mencius in the 1930s: I. A. Richards, Fung Yu-lan, and Abe Yoshishige |
| 3. 学会等名<br>Logic in East Asian Perspective (国際学会)   |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|                                      |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>志野好伸                      |
| 2. 発表標題<br>論理学者にとっての中国哲学 金岳霖、沈有鼎を中心に |
| 3. 学会等名<br>中国社会文化学会（招待講演）            |
| 4. 発表年<br>2019年                      |

|                                     |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名<br>志野好伸                     |
| 2. 発表標題<br>光自na(口 + 那) 処来：西光万吉的政治思想 |
| 3. 学会等名<br>第六回中日哲学フォーラム（国際学会）       |
| 4. 発表年<br>2019年                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>志野好伸   |
| 2. 発表標題<br>La Voie : entre Jinsai et Sorai                |
| 3. 学会等名<br>Les concepts de la philosophie japonaise（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>志野好伸  |
| 2. 発表標題<br>Lin Maosheng's Philosophy of Education and its Background |
| 3. 学会等名<br>International Society of East Asian Philosophy（国際学会）      |
| 4. 発表年<br>2019年  |



〔図書〕 計5件

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>廖欽彬、伊東貴之、河合一樹、山村奨、志野好伸、林永強、他 | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>法政大学出版局                      | 5. 総ページ数<br>886 |
| 3. 書名<br>東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から     |                 |

|  |                 |
|--|-----------------|
| 1. 著者名<br>Gerard Siary, Toshio Takemoto, Victor Vuilleumier et Yinde Zhang (dir.), Yoshinobu Shino et al.    | 4. 発行年<br>2022年 |
| 2. 出版社<br>College de France  | 5. 総ページ数<br>-   |
| 3. 書名<br>Le corps dans les litteratures modernes d'Asie orientale : Discours, representation, intermedialite |                 |

|                                |                 |
|--------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>川原秀城編                | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>勉誠出版                 | 5. 総ページ数<br>256 |
| 3. 書名<br>漢学とは何か 漢唐および清中後期の学術世界 |                 |

|                              |                 |
|------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>池田喬・合田正人・志野好伸・美濃部仁 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>知泉書館               | 5. 総ページ数<br>416 |
| 3. 書名<br>何処から何処へ 現象学の異境的展開   |                 |

|                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>藤田正勝、林永強、他 | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>国立台湾大学出版中心 | 5. 総ページ数<br>304 |
| 3. 書名<br>近代日本哲学と東アジア |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|  |
|--|
| <p>明治大学文学部心理社会学科哲学専攻 紀要<br/> <a href="http://www.isc.meiji.ac.jp/~philo/bulletin/">http://www.isc.meiji.ac.jp/~philo/bulletin/</a><br/> 「2019 Conference: East Asian Philosophy」開催報告書<br/> <a href="https://www.meiji.ac.jp/cip/researcher/6t5h7p00000ixp6f-att/reportbyShino.pdf">https://www.meiji.ac.jp/cip/researcher/6t5h7p00000ixp6f-att/reportbyShino.pdf</a></p> |
|--|

6. 研究組織

|       | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                                | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                 | 備考 |
|-------|--|---------------------------------------|----|
| 研究分担者 | ラム ウィンカン (林永強)<br><br>(Lam Wing-keung)<br><br>(90636573) | 獨協大学・国際教養学部・教授<br><br><br><br>(32406) |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

|   |                    |
|---|--------------------|
| 国際研究集会<br>International Society of East Asian Philosophy      | 開催年<br>2019年～2019年 |
| 国際研究集会<br>第六回中日哲学フォーラム  | 開催年<br>2019年～2019年 |
| 国際研究集会<br>Colloque : Les concepts de la philosophie japonaise | 開催年<br>2019年～2019年 |

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|